令和２年度　　第１回スクラムスクール運営協議会　　記録

令和２年７月９日（木）　19:00～20:30
会場：御前崎市研修センター
（全体会：２階大研修室）

１　教育長あいさつ（河原﨑 全 教育長）

スクラムスクール運営協議会は、御前崎の教育・スクラム御前崎の元となる組織・大事な会議だと認識している。園から高校まで、そして、地域・家庭の人が一堂に会して、子供たちの育ちを見守っていく大事な会議。この会あっての御前崎だと思っている。

コロナの影響で、5 月 24 日まで休校していたが、再開をして、6 週間が経とうとしている。私たちが一番心配だったのは、学校を再開して子供たちがリズムを取り戻せるかどうかだった。欠席状況をみると、学校を再開した 6 月 1 ヶ月の欠席率をみると、昨年と比較して市内の各小中学校の全てが昨年より少し低くなっている。出席率が高くなっている。最初の頃は、学校に来てもぐったりしている・疲れ気味だったりするという感想も聞かれたが、それでも、学校に来てくれているということは嬉しいこと。御中・浜中への学校訪問で授業の様子を参観したが、生徒の様子でいつもと違うのは、マスクをしていること・若干距離はとっているが、友達同士意見を述べ合うとか教え合う姿が見られ、ほぼ元通りになっていると感じた。

昨年は、「ゲーム障害・ネット依存防止」ということをテーマに皆さんで話し、具体的な方策について話し合ったりした。今年もと思っていたが、コロナの関係で途切れていた。この間に国が「一人一台のパソコンの生徒への導入」を早め、今年度中に整備することになった。学校が休校の間は、家でパソコン等を使っての遠隔的な授業ができた。パソコンの有用性が改めて見直された。その反面、それぞれが自宅でやっていると、やる子とやらない子の学力の差が広がっているという話も聞いた。家にいるとどうしてもメディアとの関わりが長くなって、ゲーム・テレビを見る時間がふえているという心配があるということが、ＰＴＡの皆さんやアンケートの調査結果からも伺える。

私たちが昨年まで取り組んできたことについてコロナに関連して改めて考えて直してみる必要があるかもしれない。本日、担当から説明があるので、そのあたりを加味しながら、今年度、どういう風に子どもたちが基本的生活習慣を身につけ、ゲーム障害・ネット依存から、自分というものを律しながら、メディア等の機器を利用してくことについて考えていけたらと思う。コロナの影響で、人と人との直接の関わりが制限されることが多いが、逆に、コロナの影響で人と人との直接の関わりの大切さを感じたのではないか。

今年も池高の生徒さんの力を借りて、スクラムポスターができた。毎月 10 日、あいさつ運動が行われる。協力をお願いしたい。

２　会長紹介及びあいさつ

・浜岡中学校区会長

この会への参加は、今年で２年目。昨年は「ゲーム障害・ネット依存」、その前は「早寝早起き朝ごはん」に取り組んできた。どういう方法で活動していけばいいかを皆さんで話し合って、有意義な活動にしたいので、宜しくお願いいたします。

・御前崎中学校区会長

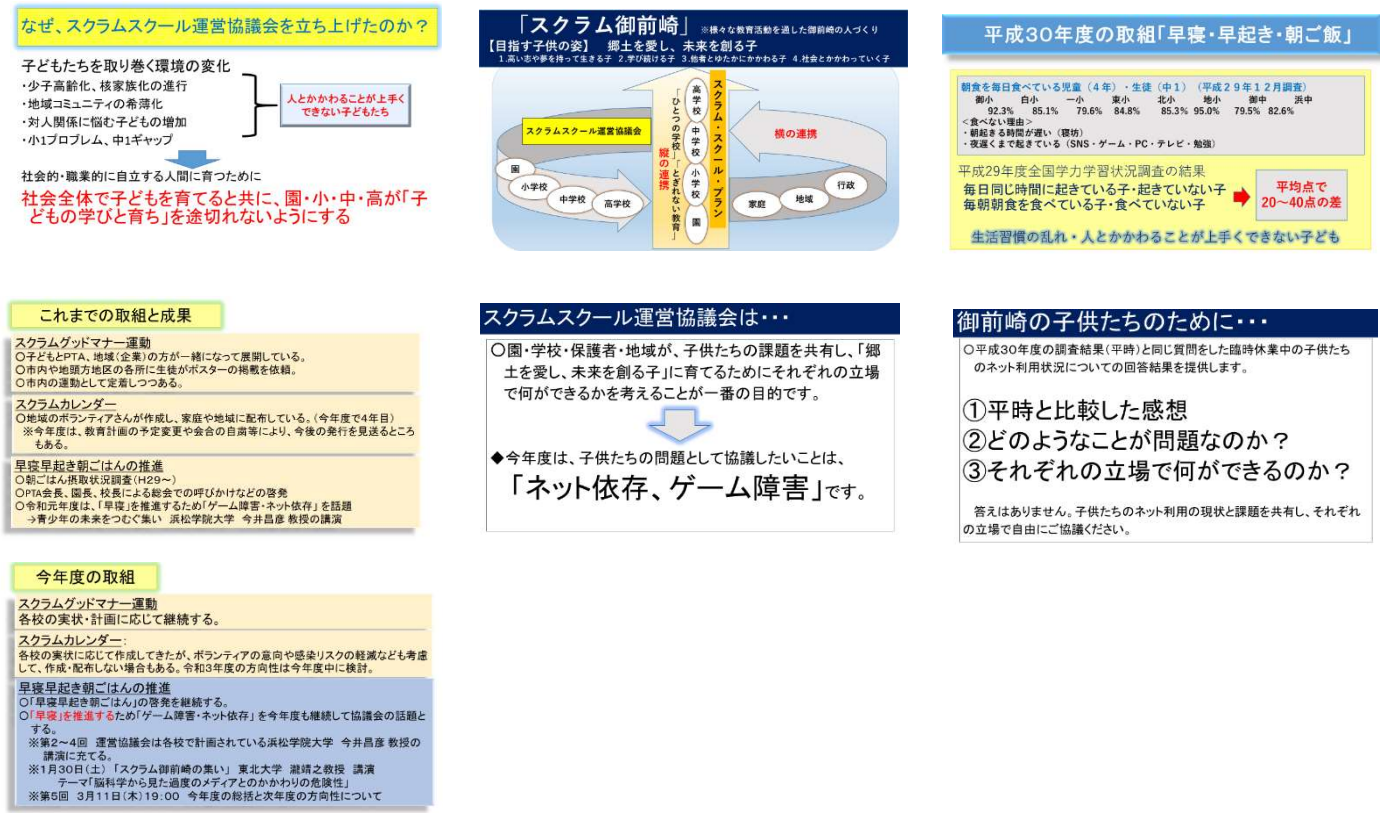
いろいろな立場の方がいらっしゃっている。皆さんはおそらく、地域に貢献したい、子供たちのためになり

たいという方たちがいらっしゃっていると思う。是非、皆さんの力を集めて、より大きな力になっていけたらと思う。

3　講師紹介　　中村美智太郎 静岡大学准教授　島田桂吾 静岡大学教職大学院講師

4　スクラムスクール運営協議会について　　学校教育課より

○これまでの経緯とこれからの取組（鈴木秀和学校教育課長より）



○子どもの生活とスマートホン・ネット（調査結果より　澤入基裕指導主事より　※別紙参照

・休校中の生活について

・どのような生活を送っていたか

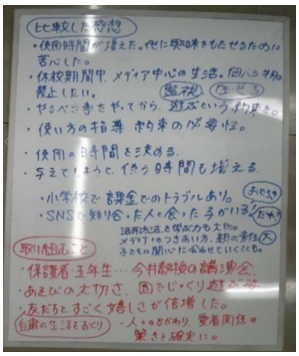
インターネットアンケート（２０１９．２）と休校期間中の生活アンケート（２０２０．５）の比較

5　グループ協議

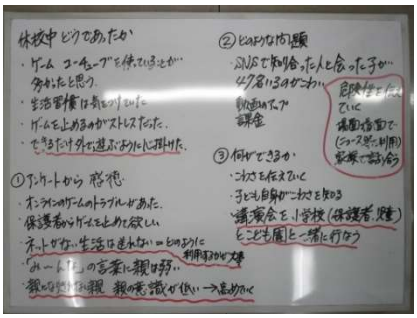
○話し合いの内容

・休校中どうであったか。　・どのようなことが問題か。　・それぞれの立場で何ができるか。

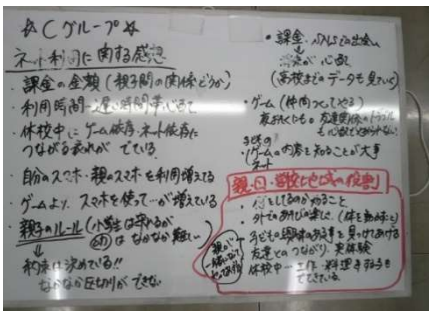
A（第一小学区）



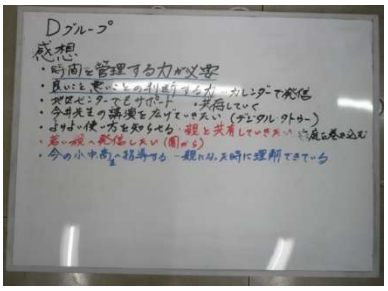
B（東小学区）



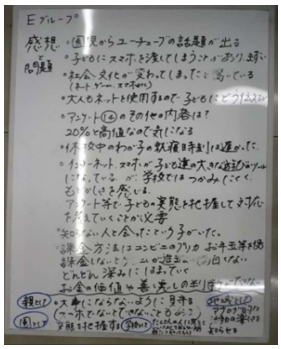
C（北小学区）



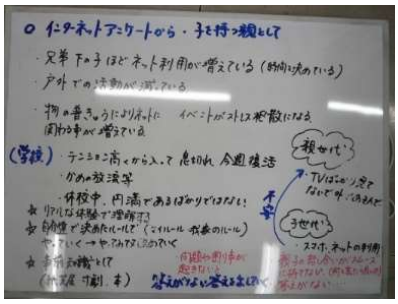
D（浜岡中・池高）



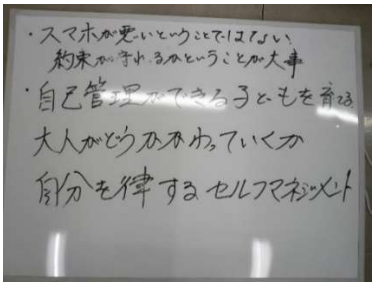
E（白羽小学区）



F（御前崎小学区）



G（御前崎中・地頭方小）



6　グループ協議報告　　Åグループ　Gグループ

7　指導・助言

○中村美智太郎 静岡大学准教授

とりわけ今年度は、コロナを巡る状況が私たちの喫緊の課題となっている。コロナが私たちにもたらすものの一番の脅威は、感染して命を落とすこと。それよりも危険なのは分断かもしれない。この半年間、分断の危機に直面することになった。この半年間、ステイホームということで、家の世界と社会を分断することになった。

職場には、なかなか通えないので、あまり接しない人が増えてしまった。子どもたちは、学校に行けない。友達や先生に会えない。これも大きな分断。私たちにとってこの半年間のテーマは、分断ではなかったか。この分断をどうやって乗り越えるか。解の無い問題。分断を乗り越えようと言った時、普通通りに教室へ行って、みんなで授業を受けたら、それで分断は乗り越えられるのだろうか。なかなかそれも難しいこと。今までと同じことをやり続ける時、できなかったりする。誰が何をしたらいいのかということを、誰も知らない問題。この難しい問題に、向き会わなくてはいけないということ。極めて現代的な課題。

学生たちもステイホームということで、大学に通うことなく、学位を履修しなくてはいけないので、オンラインでの授業・オンデマンドで受けなくていけない。普段会える友達と会えない。中に精神の不調をきたす人もいると聞く。その気持ちもすごくよくわかる。しかし、なかなか難しい問題で解決することができない問題。

スクラムスクールという名前がこんなにリアリティのある日はなかったのではないか。スクラムとは、分断を回避できるという営み。この会の名前が、予測していたのではないかと思うくらい、極めて力強いイメージを持った。スクラムという言葉が、いつもより輝かしいものに感じた。解がないので、解をどうすればいいか。解をみんなで作るということだと思う。「答えることができない。誰か教えてくれないか」ではなくて、解を私たちみんなで作っていかなくてはいけない。御前崎市は、どういう解を作れるか。そこが今問われている。各グルー

プで話し合ったが、必ずしも解は出なかったと思うが、解に少し近づいたということは、大きな前進。

解がないので、市も県も国も同じように必死に解のない問題へ向き合っている。例えば、新しい生活様式という言葉を聞くようになった。本当の意味で、新しい生活様式になかなか馴染むことができない。当たり前の話でこれまでに経験したことのない事態に直面しているのだから、新しい、何が新しいのか、わからない。新しい生活様式、どうやったら、正解なのか。それもわからない中で、それが一番、厳しい状態。今年度のテーマは、「ゲーム障害・ネット依存」。これを改善していきたいということで会を進めている。しかし、新しい生活様式には、ゲーム依存・ネット依存を誘発するようなものがたくさん入っている。それをどうやって両立させることができるか、非常に難しい問題。先ほどの発表の中に、自分で自己管理できる人を育てるということがあった。

私たちは、誰かに決めて欲しい。誰か正解を教えて欲しい。これにぴったりの言葉は、他律。他の人が律してくれるのを実は、私たちは待っている。ところが、普段私たちは、他律はある程度心地よい生活を作ってくれるので、歓迎しながらも、ちょっと生き苦しいなと思って生きている。そこでたまには、いけないけれども、信号無視などをこっそりやったりする。それは、他律の状態のルールを自分で決めて自分で適用していく状態。これを自律という。自分で自分を律するという形。私たちは、他律と自律の両立を目指しているということに普段からなっている。当然、法律を犯すと罰せられる。非常に強烈な他律があるから。ところが、法律も上手く解釈できないところもあって、「やってはいけない」とか「いいとか」その境目も実は、自律の範疇にある。ここで重要なことは、おそらく、他律を決めているのが私達自身でもあるということ。私達たちがこれをやっていいとか、やってはいけないものを、実は、自律的に決めているということ。自分で決めることが出来るということを大事にできればよいのではないか。

これは、子供にとっても同じで、「ゲーム依存に陥ってしまってはダメだから、禁止しましょう」としたら、子供はどう思うか。「ネットは、危険だから禁止しましょう。SNS は、危険だから完全に使わないようにしましょう」子供にとってみたら、全部、他律の状態。私達が他律を必ずしも、心地よくないと感じるように、子供にとってもあまり心地よくない。そうすると、何をするかというと目を盗んでこそこそと活動するようになる。こうなってしまったら、とりわけネットの世界は、大人の目の届かない部分のほうが大きいので、こそこそした部分が拡大していくことになる。むしろ、大事なことは、子供たち自身が、自分たちで決めることができるようになる領域をきちんと確保してやること。

先ほど、衝撃的なデータとして SNS で見知らぬ人と会っていたということが、紹介された。確かに衝撃的なデータに見える。しかし、本当にそうなのであろうか。本当に知らない人に会うことは、だめだったのか。完全に悪なのか。本来、SNS は、見ず知らぬ人と知り合うことができる非常にポジティブなツールのはず。その事自体は、善でも悪でもない。もしかしたら、魅力的なことかも知れない。日本以外では SNS は、「他の見知らぬ人と知り合う有力なツールとして子供も大人も活用している」という事実がある。ところが、報道のされ方やそのデータの解釈の仕方でそれを「怖い・恐ろしい。じゃあ、禁止しましょう」という制限をする。つまり、他律の領域をどんどん増やしていくということになりがち。確かに、知らない人と会うことは、リスクは高い行為。推奨はできない。しかし、推奨はできないということに子供が自分で気づけるかどうかということが大事なことではないか。大人が先手を打って「だめだ。危険だ。やってはいけない。これもだめ」という形でやっていくと自分で決められる力はどんどんつかなくなっていく。ある程度リスクはあるという情報を伝えながら、子供たちがそれを自分たちで決めることができる領域をしっかり見守ることが大事かも知れない。

グループの話し合いの中でSNSの危険性だとか、ネットの使い方が良くない。あるいは、良かったという意見もたくさん出ていた。できれば、良かったというところに注目して、子供たちにとって、自律的な世界に向けて、ただでさえコロナの状況で大人以上に閉塞的な世界だと思って生きている子供は多いと思う。その閉塞的な世界を更に大人の力で閉塞的な状況にしていくのは望ましくないと思う。むしろ、一緒になって作っていく。解のない問題だから、答えを子供と一緒になって作っていくこと。それは必ずしも大人が答えを与えてあげることではなくて、大人と子供が一緒になって答えを作っていけるような。それが、新しい生活様式の基本的なスタイルになっていくのではないか。非常に充実した話し合いだった。是非このスクラムという言葉の大切さ、その営み自体の価値にもう一度気がついて、是非途絶えることなく、推進していって欲しい。

○島田桂吾　静岡大学教職大学院講師

御前崎市のスクラムスクール運営協議会の特徴は、縦の連携と横の連携を合わせているというところが大きな特徴。一般的なコミュニティスクールは、学校ごとに設置される。各学校の教育課程について承認する権限をもつというところが法律上の特徴。御前崎市の場合は、中学校区ごとになっている。幼・保・こども園から、浜中学区は、高校までの関係者が一同に集まっている。年齢の発達段階においていろいろな課題だとか同じテーマであっても見え方が違ったりするわけだし、学校と保護者と地域の方がかかわっている世界が違うので、同じ事態でも違って見えてくる。それを越えた対面の場でも協議を共有するというところによって新たな世界が見えてくることによって、それぞれの幅が広がってくる。そこに、スクラムスクール運営協議会の意義がある。

これまでの取り組みについても、あいさつ運動とか、スマホ・ネットとか、学校だけで変えていくことができない生活習慣、家庭教育のところに関わっているテーマを扱っている。まさに正解はない。各家庭によってもそれぞれの考え方があって、家庭の中にもいろいろな状況がある。多様な世界がある中で、一つの社会としていろいろな課題がある。それをどう解決していくか、というところについて協議しているスタイル。正解が無い中で、我々大人が、正解がないことに対して議論していく。これが、小学校の新学習指導要領の中でうたわれている主体的・対話的な深い学び方になっていく。

社会の問題について、みんなそれぞれの立場を越えて協議する中で、一つの解は導き出せないかも知れないけれども、それに向けてみんなで知恵を出し合って、より良い対策を考えて実行していく。それがまさにスクラムスクール運営協議会。スクラムスクール運営協議会の 1 年目は、このスタイルにもっていくのに、苦労していた。1回ごとにスムーズに会話が進むようになってきている。短い時間でも内容が濃い議論がされていて驚いた。今年度も、各学校とか園とか、保護者、PTAの方地域の方がそれぞれの持ち場で活かして実践してもらうといいのではないか。

大学の今の状況は、基本的に 7 月までの前期の授業は、オンライン・オンデマンド。基本的にはオンデマンド。学生に、6月の途中経過ということで「オンデマンドやオンラインの授業はどうか？」というアンケートを取ったら、6から7割が「今のままでよい」という回答。正直びっくりした。ネット環境に慣れているので、違和感は無かったのかもしれない。他方で、新入生は不安を持っている様子が見られる。世の中的には、ソーシャルディスタンスで対面の距離を取りなさいということになっている。ソーシャルディスタンスが進めば、進むほど、ネット空間・バーチャルの世界との距離はむしろ近づいていくのかも。リアルとバーチャルの世界の壁が低くなってきているのかも。境目の認識がなくなりつつあるのかも知れない。世の中の進化と社会の状況の関わりをここ3ヶ月では肌で感じることがある。

ネット依存については、古くて新しい課題。これからどんどん進化していく課題だろう。そういう意味で、新しい社会のルールを考えていかなくてはいけない。それは非常に壮大な問題なのかもしれない。しかしそれは、逆に、それを当たり前と考えている若い世代は、むしろリアルのほうが薄くなってくるのかもしれない。そうなってくると、ネットが危ないだけではなくて、むしろ、ネットを使うことを前提で、でもこういうところに気をつけなくてはいけないという主従関係を変えなくては、いけない時が近々くるのではないか。そうなってくると、実際に使って子ども達の考え方をどう拾っていくかということもとても大事になってくる。他方で、リアルの良さというものを伝えていける・感じてもらえるような取り組みというものを合わせていくことが大事。スクラムスクール運営協議会の場合は、縦と横の関係で、情報共有しながら、いろいろな考え方を共有し、各家庭・各校では、ここでの議論を持ち帰ってもらいながら、その実践をこの協議会で共有してもらって、また新たな戦略を練っていって欲しい。

８、連絡・閉会　　・今後の予定